

満州キリスト教開拓団

倉橋 正直

はじめに

- 第1章 準備段階
- 第2章 中国農民を支配
- 第3章 権力の庇護
- 第4章 ハルピンに避難
- 結論

キーワード：満蒙開拓団、長嶺子、キリスト教、賀川豊彦

はじめに

戦時中、日本のプロテスタントも、いわゆる満蒙開拓団を送り出していたことを、戒能信生が初めて明らかにした⁽¹⁾。それによれば、満州キリスト教開拓団⁽²⁾には、長嶺子と太平鎮の二つがあったが、敗戦時の混乱の中で、他の開拓団と同様に、多くの犠牲者が出る。具体的には200余名が出かけたが、そのうち帰国が確認されているのが102名、死亡が46名、残余の人の消息は不明であった。

プロテスタントは、開拓団の送り出し事業に教団として、組織的に関与した。しかも、その事業は結果的にこれだけ多くの犠牲者を出し

た。にもかかわらず、戦後、プロテスタント各派は、このことに目をつむり、ずっと問題にしてこなかった。戒能信生が指摘するように、「ところがこの満州開拓基督教村の存在は、戦後キリスト教界の中で全く忘れ去られている。」⁽³⁾。

そういった状況の中で、戒能信生は満州キリスト教開拓団のことを初めて「発掘」し、送り出しにかかわったプロテスタントの宗教者としての責任を厳しく告発した。彼の告発の意義は比類なく重い⁽⁴⁾。こういった観点からして、戒能論文の持つ意義の大きさは、いくら強調しても強調しすぎることはない。

と同時に、戒能論文の欠落部分も指摘せざるをえない。論文発表が1981年であったという時代の制約も働いていると思われるが、戒能論文はいわば被害の観点からだけ書かれている。すなわち、団員の名前及び、その安否だけを調べている。その結果、これだけ多くの犠牲者を出したのに、戦後、教団は無視していると告発するに留まっている。

私は以前、満蒙開拓団は中国人農民の土地を取り上げて入植し、本当の意味の開拓をしていないから、その実態は満蒙「既耕地横取り」団にすぎないと説いた⁽⁵⁾。そういった、いわば加

(1) 戒能信生「知られざる教団史の断面——満州開拓基督教村」、『福音と世界』1981年12月号

(2) 正式には「満州開拓基督教村」と称した。しかし、別に満州基督教開拓団とも称している。本稿では後者の開拓団のほうで呼ぶことにする。

(3) 前掲、戒能信生論文、39頁

(4) 戒能信生は東駒形教会の現役の牧師である。教団内部からの告発だけに、きびしいものがある。

(5) 倉橋正直「日本の植民地支配への視点——満蒙開拓団の虚構」、青木美智男等編『教員になる人のための日本史』、新人物往来社、1998年、226～245頁

害の観点から、満州キリスト教開拓団を見てゆきたい。なお、二つの開拓団のうち、本稿では長嶺子のほうだけを扱った。また、本当の意味の開拓をしていないのであるから、本来はカッコをつけて「開拓団」とでも表記すべきであるが、煩雑さを避けるために、そのまま開拓団とした。

第1章 準備段階

賀川豊彦が1938年の満州特別伝道の際、北満の開拓地を視察する。このあと、彼が満拓公社の坪上総裁と面談した時、キリスト教開拓村の建設計画が浮上したといわれる。これに在満のクリスチャンも呼応する⁽⁶⁾。弾圧や迫害を少しでも減らしたいという思惑から、賀川をはじめとするプロテスタントの指導者たちは、満蒙開拓団の派遣という国策に協力してゆく。

1939年11月の日本基督教聯盟第17回総会で、満州国移民村に関する決議案が採択される。翌年3月には、賀川豊彦を委員長として、満州基督教者村企画委員会が組織される。日本基督教聯盟はプロテスタント各派が参加する、ゆるやかな集まりであった。それが、満蒙開拓団の送り出しを組織として正式に承認してゆく。

開拓団の団長に、賀川の弟子の堀井順次が選ばれる。1904年生まれ、この時、兵庫県加西郡の飯盛野教会の牧師であった。農村伝道をかねてから重視していた賀川の方針に従い、堀井順次は兵庫県の山間部で十字愛道場を経営していた。農村伝道の経験を持つ彼はたしかに開拓団の団長に適任であった。1940年3月、彼は満州開拓村企画主幹に選ばれる。以後、三度、満州に渡って入植予定地などを入念に調査した。このように、プロテスタントによる開拓団の送り出し事業は、賀川豊彦の圧倒的な影響の

下に計画され、実行された。それが一つの特徴になっている。

当初、入植地は牡丹江省牡丹江市郊外の四道溝に予定されていた。ここはソ連との国境に比較的近い。そのこともあって、多くの開拓団がこの近辺に入植していた。ところが、1940年7月になって、ハルピンの西方約18キロの長嶺子に変更される。

変更の理由は、四道溝一帯が軍用地に組み込まれたからと説明されている。それでは、なぜ変更後の新しい入植地にハルピン近郊の長嶺子選ばれたかである。1940年7月の時点では、米英との戦争はまだ始まっていない。太平洋戦争の勃発はまだ1年半先のことであった。

長嶺子はハルピン近郊に位置した。馬車を使えば、ハルピンまで日帰りが可能であった。交通が便利であって、見学者は比較的簡単に長嶺子の開拓団まで行って、現地を見学することができた。実際、後述するように、満州国内や内地から見学者が多く訪れ、同開拓団はショールームの役割を果たしたという。

それでは、当局側は長嶺子の開拓団をショールームとして、誰に一番、見てもらいたかったかである。私はキリスト教国である欧米諸国に対してであったと推察する。長嶺子のキリスト教開拓団を実際に見せることで、日本人のクリスチャンも満蒙開拓という国策に協力していることを、欧米諸国の人々に知ってもらおう。そして、満州国における日本の支配に対する彼らの理解を求めようとしたのではなかろうか。

そのためには、たとえば牡丹江市郊外の四道溝では遠すぎて、外国人である欧米諸国の人々が簡単に見学に行けなかった。ハルピン近郊の長嶺子だからこそ、彼らでさえ、現地見学が可能であった。こういった配慮が働いて、変更後の新しい入植地に長嶺子選ばれたと私は考え

(6) 満鉄理事の千葉豊治がその中心であった。千葉は、『満州基督教者村建設に就て』(雲の柱社、1940年、

28頁)というパンフレットを書いている。

る。実際には1年半後に太平洋戦争が始まってしまい、欧米諸国の人々に長嶺子のキリスト教開拓団を見学させるという企画は実現できなかったが、1940年7月の段階では、この可能性が真剣に追求されたと考えたい。

当初、開拓団に参加するクリスチャンを2年間にかけて、50戸、募集する計画であった。プロテスタント各派の機関誌に開拓団員募集の広告が掲載された。また、教会の集まりで、牧師から直接、信者に対し、募集の呼びかけも行われた。しかし、思うように団員は集まらなかった。そのため、募集期間を延長している。

応募者に対し、教団側は1ヶ月間、講習を施した。東京の世田谷区祖師谷にあった武蔵野農村文化研究所が訓練所となった。同研究所はもとも賀川豊彦が主宰していた。ここにも、本事業に対する賀川の影響の大きさが現われている。

前述したように、団員の集まりが悪かったの

で、彼らに対する講習会は8回に及んだ。講習会で、団員に講義した講師たちはみなプロテスタント界の有名人ばかりであった(表1)。講義題目を見ると、彼らの講義の多くは開拓団の実際の生活に役立ったとは思われない。それでも教団の幹部から親しく講義を受けたことで、受講生たちは感激し、また、教団の組織的関与を実感したはずである。

初期の段階では、開拓団ということで、応募資格には農業の経験を有するものという条件がついていた⁽⁷⁾。しかし、のちになると、その条件はなくなる。戦争の長期化に伴い、食糧増産が叫ばれるようになる。農民に対し、一方では食糧供出が厳しく求められるようになるが、他方では食糧増産を実現するために、農民に対し種々の優遇策が採られてゆく。この結果、農民の生活は皮肉にも、小康状態になってゆき、満州に出かけてゆく必要が減少してゆく。日本内地で、なんとか暮らしてゆけるならば、どうし

表1 第7回の講習会の講師と科目(1943年2~3月)

| | | | |
|--------------|-----------|------------|-------|
| 満州移住論 | 大蔵公望 | 旧約聖書の移民 | 都田恒太郎 |
| 満州農業論 | 拓務省技師 | 世界の動向と満州移民 | 斎藤惣一 |
| 東亜協同体論及び農業工学 | 松山常次郎 | 満州開拓と基督教 | 益富政助 |
| 協同組合論及び満州岩石学 | 賀川豊彦 | 開拓者の精神 | 遊佐敏彦 |
| 食糧問題と満州開拓計画 | 松山元次郎 | 開拓者の天文学 | 水野良平 |
| 基督教農民道 | 栗原陽太郎 | 讃美歌について | 由木 康 |
| 日本基督教兄弟愛史 | 生江孝之 | 明治文学と基督教 | 斎藤 潔 |
| 基督教と開拓精神 | 真鍋頼一 | 修道院史の教訓 | 二瓶要蔵 |
| 世界移民論 | 小林 誠 | 開拓団の農民文学 | 鍵田研一 |
| 聖書と農業 | 小川渙三 | 協同炊事論 | 山岸 晟 |
| 基督教と建国精神 | 野口末彦 | 満州の林業 | 松山 望 |
| 聖書 | 小川清澄・三浦清一 | 豚肉加工の実習 | 椎原堅三 |
| 満州移民と純潔問題 | 久布白落実 | 立体農業と農産製造 | 藤崎盛一 |

『日本基督教新聞』2435号、1943年1月28日

(7)「同志移民募集要綱 応募資格(ロ)職業 現在自から農耕に従事する者又は農耕に充分の経験ある

ものとす。』、『神の国新聞』1089号、1940年7月10

て満州なんぞに行く必要があろうかというわけである。こうして、農民の応募者は減ってゆく。

代わりに、農業の経験を持たない「転業移民」の応募者が増えてくる。最終的には、彼らが長嶺子の開拓団員の8割を占めた⁽⁸⁾。彼らはもともと都市に居住し、さまざまな職業に従事していたが、しかし、戦時経済への転換に適応できず、生活できなくなる。生活のため、やむなく満蒙開拓団に応募するが、しかし、彼らには肝腎の農業の経験はなかった。訓練所のわずか1ヶ月の短期間で、彼らに農業を教えられるはずがなかった。それでも、他に生活する手だてがない以上、彼らは開拓団員となって、満州に出かけるしかなかった。

農業を覚えるという点では、1ヶ月は短かすぎて、効果はほとんど期待できなかった。しかし、団員が相互に知り合うという点では有効であった。団員はプロテスタントの信者であるというだけが唯一、共通であるが、それ以外に共通点はなかった。全国から集まって来ていたから、出身地方もバラバラであった。また、「転業移民」の場合、以前、従事していた職業もさまざまであった。

そういった彼らも1ヶ月間、共同生活を送ることで互いに気心がわかってくる。農業、とりわけ新たに移住した場所で農業を行うには共同作業が不可欠であった。共同作業を円滑に行なうためには、団員相互の信頼が基礎となった。開拓団員相互の人間関係をより緊密なものにするために、1ヶ月間の共同生活はそれなりに有効であった。

開拓民が農民の場合、いわゆる「分村方式」が多く採られた。すなわち、内地の村を二つに分け、片方を満州に移住させた。そうすれば、内地の村にそれまで存在した地縁・血縁に基づ

く人間関係をそっくりそのまま移住地に持ちこむことができた。移住地での慣れない環境で暮らしてゆくために、緊密な人間関係を保持することが何よりも重要であった。その意味からすれば、この「分村方式」はたしかに有効であった。

しかし、転業移民には「分村方式」は使えなかった。前述したように、彼らの出身地方も、それ以前の職業もバラバラであった。それまで互いに知らない、赤の他人同士が、一つの開拓団に編成された。だから、彼らを相互に結びつける精神的紐帯は存在しなかった。これでは共同作業もうまくできなかった。

そこで、転業移民の場合、可能ならば宗教を利用しようということになる。天理教の場合が最も知られているが、それ以外にも既成の仏教教団や、あるいはまた、いわゆる新興宗教の教団が開拓団を送り出している。ともすればバラバラになりがちな開拓団員の気持ちを、共通して信じている宗教によって結びつけようとしたのである。

たしかに宗教には、そのような要素が本質的に存在したから、宗教を利用しようという政策は一定の有効性を持っていた。プロテスタントの開拓団も、一面ではこういった流れの中で実現する。当局側(拓務省など)もまた、こういった観点からプロテスタントの開拓団の送り出しをバックアップした。

他方、プロテスタント側には別の思惑も存在した。この時、彼らは厳しい弾圧を受けていた。たとえば、1940年7月には救世軍の幹部がスパイ容疑で取り調べられている。また、同年8月、賀川豊彦も反戦を唱えたかどで勾引された。つぶされるのではないかという危機感から、教団側は次第に当局に迎合してゆく。意図的に国策

日

(8) 榎本和子著・石浜みはる監修『エルムの鐘——満

州キリスト教開拓村をかえりみて』、暮らしの手帖社、2004年、68頁。著者の榎本和子は19歳で父親と一緒に入植した。

に協力してゆくことで、これ以上の弾圧からまぬがれようとしたのである。満蒙開拓団の送り出しも、そういった方策の一つであった。

1943年2月、第7回の団員を送り出す。送り出した団員は、この段階で目標の50戸に達する。しかしいったん入植したものの、さまざまな理由から脱落してゆく者も多かった。そのため、開拓団の現有戸数は50戸を満たしていなかった。そこで、脱落者の分を補充するために、同年5月、さらに10戸を募集する。これが最後の第8回の送り出しとなった。要するに延べ200名近くを送り出したが、このうち、50名ぐらいが途中で脱落していったのである。

長嶺子の開拓団の戸数と人数の変遷を示すと、まず1943年12月で、34戸、111名であった。1944年4月の感謝報告会の時、50戸、143名であった。1945年8月の敗戦時、存団者122名、応召者33名、計155名であった。1943年12月から敗戦までの1年7ヶ月に44名、増えている。すでに内地での訓練はやっていないので、彼らは訓練を受けないで、直接に開拓団に参加している。戦争末期ということで、人の動きも変則的になっていた。

なお、長嶺子のほかに、教団は第二の開拓団も送った。南緑ヶ丘開拓団と称した第二の開拓団は牡丹江省樺川県太平鎮に入植する。45年4月に11名を送り出す。入植地が国境に近かったため、そのうち、4名が死亡した。

第2章 中国農民を支配

堀井団長ら6人が先遣隊を結成する。東京で盛大な送別会で見送られ、出発する。1941年2月11日に現地に入植式をとりおこなう。一年でいちばん寒い時期にもかかわらず、役所や満拓の関係者、および教会関係者や信者が多数集まり、門出を祝ってくれた。

長嶺子には、東長嶺子、腰長嶺子、西長嶺子の3つの集落があり、約40戸の中国農民がいた。通常ならば、満拓が中国農民をその家屋や耕地から追い出しているはずであった。ところが、満拓の追い出しが中途半端であって、中国農民は従来通り家屋に住み、耕地も明け渡していなかった。それは、直前に近くの王崗地区にある満州国軍兵営で叛乱事件が起こったからであった。まだ完全に鎮圧できず、一帯の情勢が不穏であった。だから、満拓としても、彼らを完全に追い出せないでいた。

このため、入植式が終わったあと、6人の先遣隊が入るべき家屋がなかった。長嶺子の中国農民はまだ家屋や耕地を手放していなかったからである。彼らと交渉の結果、とりあえず一軒の家の3畳間だけをあけてもらう。結果的に堀井団長ら6人が3畳間で寝起きする生活は約40日間に及んだ。

厳寒の時期(2～3月)、大の大人6人が、約約40日間、3畳間で寝起きする生活は当然、つらい。しかし、堀井たちは当局に訴え、強権的に中国農民を追い出さなかった。キリスト者としての矜持から、なるべく平和的に彼らとつき合おうとしたからである。

本当の意味で原野を開拓・開墾する場合、入植したその日から、住む所や飲料水が用意されているはずがなかった。堀井たちには、たとえ3畳間であっても、とにかく寒さや雨つゆをしのげる所が、当初から提供された。だから、彼らの場合、本当の意味の原野の開拓ではなかった。中国農民が苦勞の末、やっと耕地を作りだす。堀井たちは、中国農民の「既耕地」を、「横取り」しただけであった。だから、彼らは本当の意味の満蒙「開拓」団では決してなく、満蒙「既耕地横取り」団にすぎなかった。

6人の中に元看護兵がいた。また、大連の後援会から大量の医薬品の寄贈を受けていた。そ

こで、その薬を使って、彼が無料で周辺住民を診察する。当時、農村部に居住する中国人の医療レベルはほとんどゼロに近かった。近代的な医療から見離されていた彼らにとって、本当の医者ではない、看護兵あがりの者による医療でも十分であった。聞き伝えて周辺の住民が続々とやってくる。診察を受けた者は延べ5000人に及んだ⁽⁹⁾。

その後、中国側が全く自発的に幹線道路から開拓団へ通じる道路を作ってくれる⁽¹⁰⁾。開拓団側は医療に対するお礼の気持ちから、中国側が道路を建設してくれたと、一種の美談として受けとめる。たしかにその面もある。しかし、他方で自分たちのためでもあった。まともな道路がないために、春の泥濘で通行困難になる。自分たちが開拓団へ行って診療してもらうためにも道路は必要であった。だから、多くの住民が動員されて、開拓団に通じる道路を建設したのである。

医療事業をきっかけにして、中国農民がやっと家屋と耕地を明け渡す。開拓団員が代わって家屋に入り、また、耕地を手に入れた⁽¹¹⁾。通常、開拓団は中国側からの襲撃を防ぐために、土塀を築いた中に全員、一緒に住んだ。また、小銃程度であるが、武装もしていた。

これに対し、長嶺子では開拓団は一ヶ所に集中して居住せず、3つの集落に分散して居住した。だから、まだ残っていた中国農民と雑居することになった⁽¹²⁾。3つの集落はかなり離れて

いたから、全部の団員が毎日顔を合わせるわけにはいかなかった。日曜日の礼拝の時には必ず全員が集まるにしても、それ以外の時は3つの集落に分れて暮らした。

だから、通常の開拓団の場合のように防御用の土塀を周囲に築くこともなかった。また、銃は持ってゆかず、非武装に徹した。非武装で、中国農民と雑居する開拓団は珍しかった。キリスト者として、中国農民となるべく友好的に付き合っただけという堀井たちの気持ちが、ここにも現われていた。

一方、追い出された中国農民は出て行く先もなかった。周辺の未開墾の土地に移住し、また、あらたに開墾作業を始めるのは、事実上不可能であった。原野の開墾は膨大なエネルギーを要する大事業であったし、また、別の原野を苦勞して開墾しても、どうせ、また日本側に取られてしまう恐れがあったからである。

長嶺子の開拓団員に配分された耕地はあきれるほど広かった。全体で750町歩で、1戸当たり畑10町歩、放牧地5町歩、計15町歩〔1町歩は約1ha〕であった。アメリカ式の機械を多用する大農法か、せめて家畜を多用する北海道農法でなければ、これだけの広い土地を耕してゆくことはできなかった。

開拓団に機械はないし、また家畜も少なかった。家族の労働だけでは対処できなかった。だから、農作業を手伝ってくれる雇農〔作男といったほうがよいかもしれない。〕が必要で

(9)「三月、大連後援会より彼等拓士の為めに寄贈せる救急箱が不思議な働きを為して相互間の不快な空気を一掃して日満親善融和の機会となった。それは彼等の中に陸軍予備一等看護兵が居て附近数里四方の満人数千人を無料診療せしめた、今や近隣先住民をして彼等を神の如くに敬ふに至らしめた。」、『南満青年』1941年11号、1941年12月

(10)「最近附近の満人六百名が四日間手弁当でハメータ道路十二町、団事務所から登州李屯公道まで立派な道路を築造して、開拓団へ献げた。」、『神の国新聞』1139号、1941年12月3日

(11)「都市近郊の長嶺子のキリスト教開拓村は原野を切り拓いたのではなく、かなりの部分が既耕地であったから、すぐに耕作を始められた。独身男性として入植した広井竹己は、のちに『五〇戸集団の開拓団でしたが、耕地は一戸一二町歩で、その内五町歩は既耕地でした』と述べている。」、前掲、榎本和子『エルムの鐘』54頁

(12)「ここは、入植者と中国人の家が入り混じっていました。キリスト教村は合わせても二〇〇人に満たないのですが、東部落の端から西部落の端まで、馬車で一時間半かかるほど広いことを後になって知り

あった⁽¹³⁾。また、耕作できない畑は中国農民に小作に出した。

中国農民を完全に駆逐して、いったん無人の地とし、それから開拓団員だけで耕作してゆくという方針は、現地の中国農民とのわずらわしい折衝から免れるので、たしかに一見、魅力的に見える。しかし、現実には不可能であった。結局、機械力に乏しい開拓団にとって、周辺にいる中国農民は格好の補助的労働力であった。要するに中国農民は開拓団にとって、必須の補完物となった。

彼らを遠くに駆逐するのではなかった。開拓団は彼らの上に支配者として乗り込み、彼らを不足する労働力の補助として利用した。換言すれば、もともと存在した中国農民のコミュニティー（地域社会）の上に開拓団のコミュニティーが乗っかる二重構造となった。

こうして、もともと長嶺子にいた中国農民は遠くには退かず、周辺にとどまった。耕地をほぼ失っていたので、やむなく彼らは、あらたに入植してきた開拓民に雇われたり（雇農）、また小作農になった。以前、自作農であったものも、土地を奪われていたので、小作農として生き延びてゆくよりしかたがなかった。結果的に、安価な労働力が豊富に得られたので、開拓団は北海道農法を志向しなかった。

私は以前、満蒙開拓団は本当の意味の開拓をしていないから、その実態は満蒙「既耕地横取り」団だと説いた。しかし、「既耕地」を「横取り」するだけでなく、実はその後も中国農民を補助的な労働力として搾取していたことまでは指摘できなかった。

両者の間に厳然として支配・被支配の関係があった。キリスト教開拓団は、なるべく友好的に中国農民に対処しようとした。しかし、それにも限度があり、支配・被支配の関係をあいまいにするほど友好的なつきあいができるはずがなかった。

開拓団は中国農民を支配するだけでなく、経済面で日常的に彼らを搾取した。それゆえ、彼らの怒りは日々、増幅された。だから、日本の降伏を知った時、中国農民はこれまでの恨みを晴らすために開拓団を襲撃してくる。前述の二重構造、すなわち中国農民を開拓団の周辺に置き、補助的な労働力として利用するという方式を、ほとんどの開拓団が採用していた。とするならば、日本の降伏時、襲撃してきた中国農民とは当該開拓団の支配を受けていたものであった。別の地域にいた中国農民がわざわざやってきて、開拓団を襲撃したのではなかった。

それ故、彼らの襲撃の程度は、当該開拓団から、これまで受けてきた仕打ちによって変わった。彼らの怒りは、それまで受けた恨みに比例した。支配下の中国農民をひどく痛めつけ、そのことによって、ひどく恨まれていた開拓団に対しては、当然、中国側の反発も強かった。中国農民は開拓団を襲撃し、団員を殺傷した。

キリスト教開拓団の場合、少なくとも主観的にはせい一杯、中国農民と友好的に対処するように心がけた。そのことは中国農民側もよく理解できた。だから、彼らの恨みは相対的に小さかった。同開拓団に対する襲撃は、土地・家屋を返せと圧力をかけにきた程度であって、本気で団員を殺傷する気はなかった。だから、せい

ました。」、前掲、榎本和子『エルムの鐘』33頁

- (13) 「労力としては、いつ頃からか中老の現地人が出入りして、家族の者たちから慕われていた。(中略) 話しあって常雇いとした。農舎の片隅に自分の寝場所をつくり、かまどを築いて住んでいた。」、前掲、堀井順次『敗戦前後』35頁
「わが家では中国人を雇っていませんでしたが、開拓

村を維持管理する仕事に従事している場合や、体力がない場合、中国人を雇わないと作業ができません。耕地全体があまりに広いからです。」、前掲、榎本和子『エルムの鐘』41頁

- (14) 堀井順次「斜陽は悲し長嶺子 キリスト教開拓団の最後」(『農民クラブ』1949年9月号)が、中国農民の襲撃してきた時の様子を物語っている。しか

ぜい、小ぜりあいでは一人の団員がなぐられる程度ですんだのである⁽⁴⁾。

第3章 権力の庇護

1941年6月、戦時体制が強化されるなかで、従来の『日本基督教聯盟』は『日本基督教団』に改組される。前者はプロテスタント各派のゆるやかな集まりであったが、後者はプロテスタント各派全体を一括して、いわば一つの教団として取り扱おうというものであった。満州キリスト教開拓団の事業はそのまま後者に引き継がれた。

満州（満州国と関東州を合わせていう）にいるプロテスタント各派は、当初からキリスト教開拓団の企画を支援してきた。彼らは後援会を組織する。その後援会の第1回中央委員会が1941年3月に開かれ、「全満日本人信者有志より参万円募集、長嶺子に教会堂を建設する事、其寄付金募集目標を大連四、奉天三、新京二、哈爾濱一の比率に依る事を決議した。」（『南満青年』19年4号、1941年4月）

この比率は、各地の信者数に基づいて決めたのであろう。最も有力だった大連の後援会は救急箱を寄贈した。相当量の医薬品だったので、前述したように、これを使って、付近の中国農民を診療することができた。

1941年6月、ハルピンYMCAの奉仕隊として、白系ロシア人20名が来て、建築作業を手伝ってくれた。同年7月、奉天医科大学から、医療奉仕隊が来援した。同年10月、大連基督教婦人矯風会は子どもの衣類など冬服、百数十点を開拓団に送った。また、同年11月には、「婦人矯風会慰問品衣類大小七十類、書籍約百冊、双葉学院慰問品衣類大小約八十点、書籍一箱。

YMCAより雑誌約百等を大打行李一、木箱一個に詰め計三個を託送り。」（『南満青年』19年4号、1941年4月）

1942年秋、小学校の校舎を兼ねた教会の建物が落成する。教会の建設費として3万円を募金していたので、この3万円で建てられたのであろう。ハルピン工科大学の鈴木正夫学長が設計したもので、丸木作りのデンマーク風の建物であった。床面積は約100坪であった。団員の子弟はそれまでハルピンの小学校に通っていた。建物ができたので、以後、ここが彼らの学校になった。

この建物は臨時の教会堂と意識されていたので、まだ木造であった。敗戦直後、中国農民の焼きうちに遭い、焼失してしまう。もし本建築まで進み、石造りの建物まで建てていれば現在まで残ったかもしれない。

教会は聖ヶ丘（ひじりがおか）教会と名づけられた。二人の牧師〔団長の堀井順次と榎本和子の父親の横坂勝夫〕がいたが、教団から正式の教会とは認められなかった。日曜日の礼拝には、日ごろは少し離れて住んでいる者も参集した。教会の近くのエルムの木（セイヨウニレ）に鐘が吊されていて、集まりの合図などに鳴らされていた。それが榎本和子にはよっぽど印象的だったようで、彼女の本の題名に使っている。

聖ヶ丘教会は開拓団の日本人だけの教会であった。ことばが通じないのでしかたがない面はあるが、周囲の中国農民に対して布教活動は一切していない。日本人だけが日本語で礼拝の時を持った。その様子を、周囲にいる中国農民はきくと不思議なものを見るような目つきで、傍らから眺めたことであろう。

1941年11月の視察団報告に依れば、この段

し、堀井順次は、この時、召集されて、すでに開拓団から離れていた。したがって、家族や元の団員か

らの聞き書きをもとに記している。伝聞であって、彼自身の見聞ではない。

階で団員は20戸、47名であった。耕地は100町歩で、そのうち、畑地が64町歩、水田が2町歩であった。残り34町歩は今年にかぎり、中国農民に貸し付けた。このように、自分たちだけでは到底、耕作しきれないので、約三分の一の34町歩を小作に出している。今年に限るとあるが、これは開拓団のいわば主観的な願望であって、第1年だけでなく、その後も引き続き同程度の耕地を小作に出したと推測される。

榎本和子によれば、開拓団の「主要産物は、第一年目は大豆、二年目はトウモロコシ、三年目は高粱という、一毛作の輪作型でした。」(前掲、榎本和子『エルムの鐘』、40頁)

堀井順次は、1年目は農法に失敗したので、収穫は皆無に近かったと述べている。「乾燥地帯の満州では、土起こしをする場合、表土の水分を保持するため、表面の土を押し分ける程度に浅く耕さねばならない。それを知らないわれわれは土壌をすっかり乾燥させてしまい、種を蒔いても、ろくに芽も出なかった。」(堀井順次『敗戦前後——満州キリスト教開拓団長の手記——』静山社、1990年、33頁)

他方、別の視察報告は、「収穫は馬鈴薯一万貫、白菜一万貫、大豆二十石、小麦二十石、支那大根、ゴボウ、葱等々一年間の食糧と種子を充分獲得した。」(『神の国新聞』1139号、1941年12月3日)と述べている。入植1年目で、すでにこれだけ豊かな収穫があったというのは、ちょっと信じられない。

堀井順次が伝えているように、開拓団自体は慣れないこともあって、耕作に失敗し、ほとんど無収穫だったけれども、しかし、別にかんりの土地を中国農民に小作に出していたので、小作料として、これだけのものを彼らから受け

取ったと理解すれば、二つの史料は矛盾しない。たぶん、実情はこんなものであったであろう。

長嶺子の開拓団は水田耕作をやっていない。榎本和子によれば、陸稲を少し作っていた程度であった⁽¹⁵⁾。日本人は米を主食にしている。満州に移住してきても、彼らはその食習慣を変える気はなかった。こうしたことから、自分たちが耕作しているトウモロコシ、高粱、小麦、大豆などを主食にできなかった。やむなく、満拓が米を日本人に配給した。おそらく朝鮮半島で供出させた米の一部を満州在住の日本人に回したのであろう。

榎本和子は、ときどき父親に連れられ、馬車でハルビンまで出て、満拓の事務所に行った。そこで、開拓団員のための配給の米を受け取るためであった⁽¹⁶⁾。満拓から米の配給を受けていたのは、キリスト教開拓団だけではなく、満蒙開拓団全体が同様であった。満蒙開拓団は満拓のような当局側の機関の援助なしには存立できなかった。

開拓団などというと、素朴に自給自足の生活をしていたように、つい思ってしまう⁽¹⁷⁾。しかし、満蒙開拓団はそんなものではなかった。彼らは米をほとんど作れなかった。それで、やむなく食習慣を変え、自分たちが作ったトウモロコシなどを常食するように変えたかということ、それもやらなかった。結局、配給に頼って、従来通り主食として米を食べ続けた。主食を配給に頼るような開拓団などというのは聞いたこともない。この点からしても、満蒙開拓団という名前は実態と乖離していた。

2006年4月15日、私は長嶺子を訪ねた。しかし、短期間の調査だったため、キリスト教開

(15)「主食の米は満拓から配給されました。村で陸稲を実験的に作付しましたが、ごく少量でした。」、前掲、榎本和子『エルムの鐘』63頁

(16) 前掲、榎本和子『エルムの鐘』60頁

(17)「基督者開拓団の経営形態はあくまで自給自足を徹底する方針であるから、」、『神の国新聞』1111号、1941年2月26日。開拓団長の堀井も自給自足といっているが、実際には違った。

拓団のあとを見つけれなかった。長嶺湖は、なぜか干上がっていて、白っぽい湖底をさらしていた。4月中旬というのに、小雪が舞い、あたりの畑にはまだ緑がなかった。荒涼とした冬の景色であった。おおげさにいうと、人が住む所ではないと感じた。中国東北の気候風土はきびしい。ここで生まれ育った人はまだよいが、日本から移住してきた人には耐えられない自然環境である。脱落者が多く出たのは当然だと思った。

自然環境がきびしいだけでなく、社会的条件も劣悪であった。一年の半分は厳寒で、農作業はできない。多くは屋内で暮らすことになる。交通は不便で、自前の馬車を使うぐらいしかない。電気が来ていないから、近代的な生活を送る土台に欠けている。照明はランプになる。ラジオも聴けない。電話もない。

新聞も来ないし、手紙も配達されない。現金収入の機会が乏しいから、買物もできない。およそ文化から隔絶された生活であった。娯楽がないから、気がめいる。数少ない気晴らしは、せいぜいハルピンに出かけることぐらいであった。これは、彼らが大都市近郊に入植したので、享受できる利点であった。東部国境付近に入植した場合には、ほとんど「島流し」に似た状況に陥ったのではなかろうか。

また、時に在満の信者が慰問がてら、開拓団を訪ねてきてくれた。宗教によるつながりがあるからである。しかし、一般の開拓団の場合、訪ねてきてくれる人もいなかった。

医療環境も劣悪であった。まず、軽い病気は看護兵あがりの団員が診察した。重病の場合はハルピンの病院に送った。入植した1年目、多くの団員が病気になる。また、幼児1名が死亡している⁽¹⁸⁾。前述したように、小学校の校舎を兼ねた教会堂ができてからは、小学校教育は長嶺子で行なった。

キリスト者としての同志的な結合意識がどの程度、生まれたかは、キリスト教開拓団にとって、ある面では最も重要な問題であった。榎本和子がいみじくも記しているように、毎週、教会に集まり、礼拝の時を持ったが、しかし、強烈な同志的な結合意識は最後まで生まれなかった⁽¹⁹⁾。

一言でプロテスタントといっても、その信仰のあり方や儀式などに宗派により微妙な違いがあった。たとえば、彼女は礼拝の時、ハレルヤやアーメンをしばしば大声で口にする者がいて、それが不快であったと述べている。こういった出身宗派・教会の違いも、同志的な結合を結ぶのに多少、阻害要因になったかもしれない。

しかし、同志的な結合意識が不十分に終わった理由は別のところにあった。すなわち、キリスト教開拓団はしばしばアメリカ建国のビルグリム・ファーザーズになぞらえられた⁽²⁰⁾。同じプロテスタントであり、また、同じく開拓団だったからである。[これまで、ずっと述べてきたように、前者は実際には原野を開拓などしなかったが、しかし、当時は開拓するものと思わ

(18)「△六月下旬第二本隊(団員並に家族計二〇名)入植、其頃より団員中、病に倒れる者多く、六月末には幼児一名死亡、一名は重体にて入院、団員中にも入院一名、哈市に宿泊して通院せる者三名、団内病臥者数名、不快を訴ふる者数名、全員三十名余に対し一朝一升五合の米を炊きたるに尚ほ余れりと炊事係の談。」、『南満青年』19年8号、1941年9月。このように一時は惨憺たる状況であった。大連のYMCAの機関誌は実情を報じたが、しかし、内地の各派が発行する機関誌には、この種の窮状は一切、掲載さ

れなかった。

(19)「村として統一感のない感じは、わたしが入植したときもまだありました。とうとう最後までほんとうの統一感は生まれませんでした。」、前掲、榎本和子『エルムの鐘』66頁

(20)「アメリカ初期の移民達は北部地方に於てつづさに辛苦をなめた。(中略)われらはアメリカの移民達に劣らない篤い信仰と根強い努力、忍耐によって協力して進み、最後の栄冠を目指して行かう。」、『神の国新聞』1111号、1941年2月26日。

れていたからである。]しかし、両者の間に決定的な違いがあった。それは国家権力の庇護の有無であった。

それを持たなかったピルグリム・ファーザーズは、仲間しか頼るものはなかった。困難な開拓事業を行なう中で、自然に同志的な固い結合が得られた。そうしなければ、全員、死に絶えるよりなかったからである。

それに対し、キリスト教開拓団は国家権力の庇護を受けることができた。国家権力は耕地・家屋を中国農民から奪って、彼らに渡した。治安も関東軍が守ってくれた。主食の米さえ、満拓が配給してくれた。このように手厚い国家権力の庇護の下に、彼らは生活してゆけた。実際、キリスト教に基づく同志的な結合は客観的にそれほど必要とされなかった。なくても、十分生きてゆけたからである。

賀川豊彦やその他の指導者たちは、信仰に燃えた一群の人々が一致団結して、満州の未開の荒野を切り開いてゆけば、必ずキリスト教の精神に則った理想郷を築くことができると訴えた。しかし、現実には彼らが信者に訴えた、理想化された開拓団は幻想に過ぎず、この時期の満州には存在しえなかった。

長嶺子の開拓団は、キリスト教の精神に則った理想郷を築くという点では明らかに失敗であった。しかし、「転業移民」が多数を占める中で、宗教を利用して満蒙開拓団を経営してゆくという政策の一事例として見れば、むしろ成功の部類に入った。たしかに脱落者が相当な比率で出た。しかし、もし共通にキリスト教を信仰しなかったならば、もっと多くの脱落者が出たことであろう。共通の信仰があったからこそ、この程度の脱落者ですんだのである。

榎本和子は、長嶺子の開拓団がうまくいっている開拓団だと評価され、ハルピン近郊に位置し、交通の便が比較的よかったこともあって、満州国内や本土から多くの見学者が訪れたと述べている。同開拓団は、まさにショールームの役割を果たしたのであった⁽²¹⁾。

第4章 ハルピンに避難

戦争末期、開拓団の男たちに次々と召集令状が来る。1945年7月には堀井団長を含め、ほとんど根こそぎに召集される。この時、団員が苦力として使っていた中国人の何人かが、兵役の身代わりを申し出てくる⁽²²⁾。堀井は彼らの申し出に感激している。彼らに対する、これまでの自分たちの「善行」の結果、彼らが命を捨てる覚悟で兵役の身代わりを申し出てきたと理解したのである。

しかし、これは誤解だと私は考える。苦力と表現しているが、この場合は団員の所で使われている雇農である。雇農の生活はひどいものであって、むしろ兵隊になったほうが、よっぽど生活は安定した。兵隊になれば、その間、少なくとも衣食住は保証されるからである。彼らは、よくしてくれた団員の好意に報いるために身代わりとなって犠牲になるというよりも、むしろ生活向上のチャンスと見て、申し出てきたと私は理解する。

敗戦直前の根こそぎ召集によって、33名が召集された。屈強な男たちがいなくなる。残されたのは122名であった。[敗戦時で、開拓団は合計155名になる。]

日本が降伏した翌日の16日、中国農民が大挙してキリスト教開拓団を襲撃してくる。彼らは

(21) 「ハルピンに近いのでショールーム的な存在になり、外から見学に来た人たちには、うまくいっている開拓団だと評価されていましたが」、前掲、榎本和子『エルムの鐘』66頁。また、「満州国内からま

た本土から、見学に来る訪問者も少なくありませんでした。」、前掲、榎本和子『エルムの鐘』39頁

(22) 前掲、堀井順次『敗戦前後』60頁

土地や家屋を返せと要求する。前述したように小ぜり合いで団員が一人、殴られる。その晩は別の中国人たちにかくまってもらい、17日、早々にハルピンに避難する。

その途中、布引開拓団の建物が焰々と燃えているかたわらを通る。1945年の4月頃、ハルピンの現地人の間に、「日本が戦争に負けた時、ハルピン近郊の開拓団のうち、東京開拓団は殺され、布引開拓団は焼かれるが、キリスト教開拓団は守られる」という噂が広がっていたという⁽²³⁾。その噂どおり、中国側から恨まれていた布引開拓団が襲撃され、焼きうちにあったのである。

キリスト教開拓団は、それまで比較的友好的に中国側に対処してきたこともあって、全員、無事にハルピンに避難できた。国境付近に入植していた開拓団の場合、ハルピンにたどりつく前に大きな被害を出していた。それに比べれば、ハルピン近郊にいたことは幸いであった。その後、1年2ヶ月ほど団員たちはハルピンで苦しい避難生活を送り、日本に帰国する日を待った。

戦後の混乱の中で、外地に取り残された敗戦国の国民は哀れであった。それでも、もともと都市に居住していた日本人はまだ多少の財産を保持していたから、それらを売り食いして、食いつないでゆくことができた。それに対し、周辺の農村部から避難してきた日本人はリュックサック一つしか持ってこれなかった。売り食いのできないので、一層、苦しい生活を余儀なくされた。キリスト教開拓団はハルピンのすぐ近くに位置していたが、しかし、着のみ着のまま、おおあわてに村を捨て、避難してきたという点では、他の開拓団の状況とあまり変わらなかった。

寒さや食糧事情の悪さ、および伝染病の蔓延

のために、体力のない子どもや老人は次々と死んでいった。死者は46名にもなり、開拓団の三分の一にも達した。やっと1946年10月になって、彼らは帰国することができた。また、召集された男たちも、シベリアに抑留されるが、ほぼ全員、帰国できた。

キリスト教開拓団に対する中国農民の恨みは比較的少なかった。たとえば榎本和子はハルピンに避難したあと、中国娘に変装し、2回も馬車を駆って長嶺子まで様子を見に帰っている⁽²⁴⁾。村に近いこともあるが、彼女たちに対する中国農民の敵対感情がひどく強ければ、脱出した村に2回も戻ってみようという気が起こらなかったはずである。

これまで、キリスト教開拓団が中国農民に対して、友好的に対処してきたことは、よく知られていた。にもかかわらず、現実には同開拓団も現地にとどまることはできなかった。いったん、日本の敗戦がわかると、やはり、追われるように村を脱出し、ハルピンに避難している。開拓団の入植と支配が、現地の中国農民をひどく苦しめていたからであった。キリスト教の信仰でまぶされた「友好」的態度でも、結局は両者の間にある深い溝を埋められなかったことを意味していた。

結論

満蒙開拓団なるものは、①本当の意味の開拓・開墾はせず、原住民の中国人の家屋・耕地を奪って入植した。開拓団ではなく、「既耕地横取り」団であった。②原住民の中国農民を遠くに追い出したりせず、雇農・小作農として周辺に置いた。彼らの労働力を補助的に利用した。日常的に彼らを搾取した。それゆえ、彼らの怒りは日々、増幅された。だから、満蒙開拓団を送り

(23) 前掲、堀井順次『敗戦前後』290頁

(24) 前掲、榎本和子『エルムの鐘』102頁

出すこと自体が、中国に対する侵略であった。

その中で、堀井団長が率いるキリスト教開拓団は、たしかにキリスト教の精神に従って、中国農民に対して比較的友好的にふるまった。具体的には、①入植時、強権的に中国農民を追い出すことはせず、3 畳間の狭い部屋で、先遣隊 6 人が約 40 日間も暮らした。②付近の中国農民に対して、無料の医療を行なった。③一部の中国農民が従前どおり、もとの家屋で、そのまま暮らすことを黙認した。④三つの集落に分かれて住み、中国農民と雑居した。⑤開拓団の住まいを防御のために土塀で囲むこともしなかった。⑥銃で武装しなかった。⑦中国農民との取引でごまかすことはしなかった。⑧団員たちに召集令状が来た時、兵役の身代わりを申し出てくる中国農民がいた。

このように、キリスト教開拓団は中国農民に対して、主観的には友好的にふるまったが、しかし、前述の基本的性格まで変えることはできなかった。客観的には、彼らはあくまで中国農民に対する侵略者・加害者であった。

教団が組織として送り出した開拓団員の三分の一も死んだのに、戦後、教団はホオカぶりしているのはけしからんという戒能論文の告発はその通りである。たしかに開拓団員は教団を守るために差し出された、いわば人身御供であった。そうである以上、教団は彼らに対して真摯に謝罪すべきであった。

と同時に、戒能論文には被害の観点だけから告発しているという弱点がある。アジア太平洋戦争で約 350 万人の日本人が死ぬ。この時、死は到るところにあった。開拓団員の三分の一が

死んだのは事実であるが、それは 350 万人の死の一部に過ぎないと見なされがちであった。だから、戒能論文が被害の観点だけから教団に対して反省と謝罪を求めても、説得力に多少欠けるところがあった。このこともあって、教団をして、現在に到るまで、長くホオカぶりをさせ続けたのではなかろうか。

これに対して、加害の側面をつけ加えてゆく。周知のようにキリスト教は戦時中、迫害された。このこともあって、戦後、日本のキリスト教界は被害者としてみずからを打ち出す。しかし、実際は一方的に被害者というわけではなかった。弾圧を免れるために、往々にして彼らは国策に迎合し、戦争に協力した。今回、紹介した満蒙開拓団の派遣もその一例であった。

たとえ一人の死者もなく、開拓団員が全員、無事に帰国できたとしても、なお教団は反省し謝罪すべきであった。開拓団を送り出したこと自体が、中国に対する侵略だったからである。プロテスタントが教団として組織的に満蒙開拓団を送り出してしまった以上、開拓団員や遺族とともに、中国に対しても謝罪すべきである。要するに、これは戦時中におけるキリスト教団、もっと広くいえば、宗教界の戦争協力の一事例として追求してゆくべき問題である。

●補注 私は、2006 年 10 月 6 日、同志社大学人文学研究所の研究会で「満州キリスト教開拓団」と題して報告した。本稿はその時の報告をまとめたものである。

その後、2006 年 10 月 3 日より 12 月 2 日まで、東京都世田谷区上北沢の賀川豊彦記念松沢資料館にお

いて、「満州基督教開拓村と賀川豊彦」という特別展が開催された。この特別展は戒能信生氏らの尽力によって準備されたものである。そこには、新たに発見された関係資料も陳列されていた。しかし、本稿では、それを利用していない。新しい資料の活用は今後の課題としてゆきたい。

